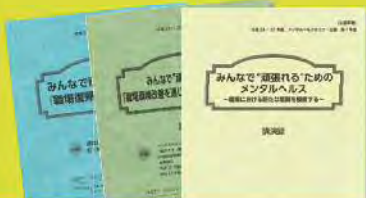
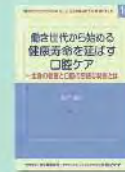


公益事業レポート2013

遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞 授賞式



遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞 授賞



「すべての人びとのいのちと環境のために」



すべての人びとのいのちと環境のために

一般財団法人東京顕微鏡院は、平成25年4月1日に、一般財団法人東京顕微鏡院に移行しました。これまで財団法人東京顕微鏡院(旧財団)が行ってきた諸事業を引き継ぐとともに公益目的の支出計画に則って公益事業を実施し、これにより「健康な命」と、それを支える「生活環境衛生」の維持・向上・増進を目指し、もって社会福祉に貢献することを目的としています。

平成25年度は、一般財団法人として新たな船出をした年でした。

新制度下においては、一般財団法人に移行した法人は、これまで法人内部に留保した財産(公益目的財産)を、自ら定めた公益目的の支出計画に基づき、本来の目的である公益目的に使用することが義務付けられています。当財団の公益目的の支出財産額は、約2,345百万円であり、毎年度52百万円*を46年間にわたって支出する計画です。(*収入60万円を差引くと実質51.4百万円)

一般財団法人としての第一歩

一般財団法人としての初年度は、平成23年3月11日の東日本大震災以降続く輸入食品等の検査命令解除による受託数の大幅な減少や、同業他機関との競合激化等、財団の事業運営にとって極めて厳しい状況で迎えることとなりました。

当財団では、この事業環境が当面は継続していくものとの認識を持ち、事業環境変化に迅速に対応すべく、総力を挙げて事業の立て直しおよび運営の一層の効率化を図っております。

6年目を迎えた遠山椿吉賞

平成25年度の遠山椿吉賞は、本賞、特別賞、奨励賞と、初めて3名の方々に顕彰させていただく機会を得ました。いずれも予防医学に関するオリジナルな内容で、いずれも素晴らしく、遠山椿吉賞にふさわしいものであったとの声を頂戴しました。一般にはなかなか知り得ない公衆衛生向上にまい進される研究者に光をあてる、この感動と喜びを、多くの方々と分かち合えたことを幸いに思います。

歴代の受賞者を振り返りますと、「予防医療の実践」、「創造性」、「これからの人の育成」を選考基準とする遠山賞の権威、というものを感じさせられます。創設以来、選考委員は、学識経験豊富な第一級の方々をお願いしておりますが、本賞の趣旨に対する先生方の真摯な思いと厳正なる審査の賜物であります。改めて当財団の創業者、遠山椿吉博士に心からの感謝を捧げたいと思います。

公益目的事業のこれから

平成26年度は、事業環境の厳しさから、法人

運営のバランスを図ることに重点を置き、公益目的事業は、核となる継続事業の質の維持向上に努めることとしました。

123周年を迎え、将来の展望

1891(明治24)年、一台の顕微鏡から事業を興した遠山博士の願いは、正確な診断の下に人びとのいのちを救うこと、“健やかないのち”の追求でした。数々の苦難を乗り越え事業の礎を築いた博士は、この業を永く後世に残すため東京顕微鏡院に財団法人の認可を得、その翌年に亡くなります。

その後も当法人は事業を展開し、戦後は10年間の休眠期を経て94周年(戦後再興30周年)以降100周年、110周年、115周年、120周年の成長の節目には、創業の歴史を記念するとともに、保健医療の進歩発展のため社会へ貢献する誓いを新たに、その時代の先駆的なテーマでシンポジウムを開催してきました。

ここに、およそ30年前、戦後再興30周年当時の理事長である私の父、山田匡蔵の言葉が残されています。「故細谷省吾先生が焼けビルを改修されて財団の業務を再開されてから、丁度満三十年にあたる記念すべき年…その記念として、『二十一世紀のいのちと生活』と題するシンポジウムを催した次第であります。要するにここでいう

「いのち」とは、観察の対象となり得る「生命現象」を意味するものと思われます。けれども「いのち」は「生命現象」だけなのでしょうか。現象面に現れる以前の「いのち」なるものはあるのでしょうか。」

“健やかないのち”、これを追求することは簡単ではありません。3つの世紀にわたり、歩んできた私たちのミッションは非常に大きい、ということを申し上げたい。

本年4月1日、123周年を迎えたわけですが、事業環境が大きく変化しています。「健全な生活環境」を追求する東京顕微鏡院と、「健康なこころ」と「健康なからだ」を追求する元氣プラザ両法人の一体経営により、将来にわたり、“健やかないのち”の維持、向上、増進を追求し続けたいと思います。

平成26年5月

一般財団法人 東京顕微鏡院 理事長
医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 理事長



山田 匡 通

復興支援

東日本大震災と福島原発事故から平成26年3月11日で3年が経ちました。死者1万5,884名、行方不明者2,633名、関連死含めて2万人の方が被害に遭い、3年目の今も26万7千人が避難生活を続けています。当財団の復興支援に関わる取組みをご紹介します。

■衛生管理を水産加工業の活力に

東日本大震災で被災した東北沿岸には水産加工業者が多く、当財団は営業開発部、食品安全サポート部、公益事業室が協働し、復興庁 地域復興マッチング「結の場」気仙沼、南三陸、宮古で大手支援企業と共にワークショップに参加しました。食品衛生法上の登録検査機関としてのノウハウを生かし、食品衛生講習会および個別企業相談会を行いました。

平成25年2月13日 「結の場」気仙沼 12月18～19日 「衛生管理講習会・個別視察」気仙沼商工会議所
平成25年11月7日 「結の場」南三陸 平成26年1月29日 「結の場」宮古

■気仙沼で衛生管理講習会

「結の場」(気仙沼)では、参加企業の中から希望のあった水産加工業3社10名の方を対象に、現地において衛生管理講習会と個別工場の衛生点検・助言を行いました。

参加企業は、現在も仮施設や建て直した施設で作業していますが、被災前と同様、衛生管理の一層の強化に努めたい考えです。



伊藤理事長による講習(気仙沼商工会議所)
一般衛生管理における衛生意識の向上、水産食品で問題となる有害微生物とその対策が講じられました。



衛生点検について現場の方たちにコメントする伊藤理事長
(参加企業の地元水産加工場にて)

■今後の展開

「結の場」(南三陸)では、支援企業20社と共に地元水産加工業6社と面談(共催:南三陸商工会)、「結の場」(宮古)には、支援企業25社と共に参加し、3社と面談(共催:宮古商工会議所)しました。



「結の場」(宮古)

実際に食品を取り扱う現場の方たちの衛生意識の向上や、日々、水産加工品の安全確保に努めている品質管理担当者の知識の向上を目的に、食品衛生の基本や食中毒の種類・予防等について講習会や加工場における個別意見交換会の希望に応える予定です。

*復興庁「結の場」とは、持続的に発展可能な地域経済の実現をめざして被災地域企業の抱える経営課題(ニーズ)と、支援企業内資源(ノウハウ等)とのマッチングを図るものです。
©復興庁地域復興マッチング「結の場」<https://www.reconstruction.go.jp/topics/yuinoba.html>

■研究助成：ヒト曝露評価モデル開発研究のその後

福島の放射線のがんリスクは低いと発表—京大小泉昭夫教授研究グループ

福島第一原子力発電所放射能漏洩事故を受けて、2011(平成23)年6月、「福島原発事故による大気中漏えい放射性物質に対するヒト曝露評価モデルの開発」(代表研究者:小泉昭夫京都大学大学院教授)研究費総額465万円のうち270万円を当財団より研究助成し、7月2～8日現地入りする一行の調査をいち早く支えました。

この助成金が基礎の一部となり、研究が発展し、米国科学アカデミー紀要「Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America」の電子版(米国東部標準時2014(平成26)年2月24日)に論文が掲載されたと小泉教授よりご連絡がありました。

本研究は、福島原発周辺の避難区域に接する自治体住民の平均被ばく線量調査を実施し、国内外で多くのマスコミも注目するところとなったと、京都大学ホームページに解説されています。

福島県の避難区域を除く地域の現在と将来の被ばく線量率でのがんリスクは低い(京都大学 HP http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news_data/h/h1/news6/2013_1/140225_1.htm)

小泉昭夫教授は、「遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞 特別賞」(平成22年度)受賞者です。

学術振興 (遠山椿吉賞)

すべての人びとのいのちと環境のために

2008(平成20)年度、当財団創業者、医学博士遠山椿吉の生誕150年、没後80年を記念して創設した、公衆衛生と予防医療の分野における研究者を対象とした顕彰制度です。「遠山椿吉記念 食と環境の科学賞」と「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」を設け、隔年で選考顕彰します。授賞式では、賞状、記念品、副賞100万円を授与し、記念講演およびレセプションを開催しています。

「遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞」

平成25年度は、将来の予防医療のテーマに先見的に着手したものを重点課題としました。「近い将来の健康診査の方法論を変えるようなもの」、「健康診査の受診の機会を高め、医療経済面での効果がみられ、健康診査の精度向上に資するもの」、「超高齢化社会構造における予防医療に関するもの」、「公衆衛生の発展、疫学研究に資するもの」、「こころの健康づくりにおける研究」、「性差医療に関するもの」などを想定し、幅広い分野からの応募を呼びかけました。

本賞は、地道に社会への貢献を追及する研究者を顕彰する賞と位置づけています。

遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞



岡山 明 (おかやま あきら)

公益財団法人 結核予防会
第一健康相談所 所長、
生活習慣病予防研究センター長

「医療費評価を通じた医療保険者の
保健事業の質向上に関する研究」

副賞 100万円

遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞 特別賞



伊藤 千賀子 (いとう ちかこ)

医療法人グランドタワー
メディカルコート 理事長

「日本人の糖尿病診断基準に関する疫学研究
—ブドウ糖負荷試験の経年観察データに基づく—」

副賞 50万円

遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞 奨励賞



西浦 博 (にしうら ひろし)

東京大学大学院 医学系研究科
国際保健学専攻 国際保健政策学 准教授

「感染症流行のリアルタイム分析と
疫学動態の定量化」

副賞 30万円

応募の推進策

6回目を迎える本賞の応募を積極的に呼びかけようと、2つの改善を行いました。

- ・全国の公衆衛生学教室へ応募書類の発送
- ・募集時に、「50歳未満の応募者に奨励賞、また、年齢に関わらず特別賞を設け、本賞以外に顕彰する場合がある」旨を告知

選考の過程

2013(平成25)年2月から新聞・医療関係誌・学会等約430媒体に資料を送付し、78の媒体等を通して募集告知をはじめ、また日本全国の大学公衆衛生



学教室161箇所に応募案内を送り、6月末日にはこれまでで最多の16件のご応募をいただきました。

選考プロセスは、一次審査・選考委員会という2つのステップで進めました。一次審査では、16件すべての応募論文を、各選考委員に個別に日を通していただくこととし、4つの評価軸(①公衆衛生への貢献度、②公衆衛生向上を図る創造性、③予防医療の実践、④これからの人の育成)で五段階評価を付けていただきました。集計した評価票は各委員に事前に読んでいただき、選考委員会では本賞の趣旨と今年度の重点課題を確認し、十分に討議を尽くして受賞候補者の選出に至りました。

この選考委員会の結論を踏まえ、当財団・医療法人合同の経営会議で、初めて3名の授賞が決定しました。





創業者 遠山 椿吉 (とおやま ちんきち)

1857(安政4)年山形県生まれ。東京大学医学部において別課医学を修めた後、山形県医学学校長心得などを兼任、1888(明治21)年東京医科大学漢科に入学し、衛生学および細菌学を研究。1890(明治23)年1月、帝國医科大学国家医学科に入学、同年4月卒業証書を授与される。1891(明治24)年、東京顕微鏡院の前身である東京顕微鏡検査所を創立。かたわら東京慈恵医院医学学校(東京慈恵会医科大学の前身)講師、東京市衛生試験所長などの職を兼ねる。特筆すべき業績は、東京顕微鏡学会の創立、バクテリアの研究、脚気の治療方法の研究、東京の水質管理を担い、水道の衛生管理に尽力、また保健部を新設し、予防医療を展開するなど多岐にわたる。機関紙『顕微鏡』『東京顕微鏡学会雑誌』を主宰し、医事衛生に関する数多くの著書や短歌を残し、華道、庭園学などについても著述している。亡くなる1年前にそれまでの人生を振り返り、思想哲学をまとめ「人生の意義と道徳の淵源」を上梓した。1927(昭和2)年、東京顕微鏡院を財団法人とし、初代院長に就任。1928(昭和3)年10月1日還逝。享年71歳

遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞



山田匡通理事長より岡山明氏に遠山椿吉賞を授与



受賞記念講演：岡山明氏

2月4日 遠山椿吉賞授賞式

「遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞」の授賞式・記念講演会・レセプションは、2014(平成26)年2月4日(火)にホテルメトロポリタン エドモント(東京・飯田橋)にて開催されました。授賞式には、選考委員の先生方を始め、研究者、報道関係者ほか当法人関係者など、およそ100名が祝福に集まりました。

山田理事長は、岡山氏のご研究について、「わが国の医療経済面での効果を特定保健指導の有用性から示した極めて意義深い内容であり、地味なデータの中から導いた成果を人びとの幸せの為、ご尽力・ご貢献下さいましたことに、ここから感謝申し上げますと共に、受賞をお慶び申し上げたいと存じます」と述べました。

伊藤氏のご研究については、「非常に長年にわたって糖尿病の疫学的データをフォローし、糖尿病の早期発見早期治療に非常に多くの業績で貢献されていることに感銘を受けました」と深い敬意を表しました。

また、西浦氏のご研究については、「感染症流行のリアルタイム分析という難しい課題に、数理的アプローチでその独創性を発揮し、疫学研究及び予防医療に貢献され、今後の更なるご活躍に期待されます」と述べ、「岡山先生、伊藤先生、西浦先生のますますのご活躍・ご健勝を心よりご祈念申し上げます、お祝いの言葉とさせていただきます」と、結びました。

平成26年度は、「遠山椿吉記念 第4回 食と環境の科学賞」を選考顕彰いたします。

■受賞者あいさつ

遠山椿吉賞 岡山 明氏

この度はこのような賞を頂きまして、本当に感激しております。実は受賞の連絡をいただいたとき、「本当に私でいいのか?」と思わず思ってしまった。私は現場で予防医療の実践に取り組んでおりまして、残念ながら論文として研究成果を挙げる、という意味では若干足踏みをしている状態でした。論文作成の努力は少し足りないのではと思っており、とりあえず応募するだけはさせていたいただいたという状況でした。

本日、選考結果を聞かせていただいて、逆にいくつか納得するところもありました。先ほどご紹介いただいたNIPPON DATA*研究の立ち上げへの貢献については私自身も大きな仕事をしたと思っています。元々研究を立ち上げるのが好きで、データや研究体制を整備すると、後は頼むよと別に移るということを繰り返してきました。滋賀医大だけでなく岩手医大、国立循環器センターでも同じように研究を立ち上げたものが現在多くの論文に結びついており、これら過去の仕事を評価していただいたと受け止めております。

やはり予防医療の意義は実践にあると考えており、日々健診機関での実践に取り組む中で、こうした学術的な仕事は半分諦めていたようなところがありましたが、結核予防会に移ってからも、研究者の仲間を支えられて研究を継続できたことは非常に大きかったと思います。このような状況の中で、今回の受賞に私は本当に及第点だろうかと思いつつ、本日この会場に向かって来たのですが、これからも頑張れという意味で賞をいただけたのではないかと考えております。

記念講演で改めてお話ししますが、私が集めてきたデータで中村幸志先生が日本疫学会奨励賞をいただいたことから、医療費と健康の問題はやはりこれからトピックになっていくと思います。その意味で、私が先鞭を付けさせていただいて、この分野にどんどん後進の若い方々が入ってくれば、更に発展していくのではないかと考えておまして、公衆衛生の一分野として更に発展させていきたいと考えております。この度は本当にありがとうございました。

*National Integrated Project for Prospective Observation of Non-communicable Disease And Its Trends in the Aged

遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞



伊藤千賀子氏に遠山椿吉賞特別賞を授与

受賞記念講演：伊藤千賀子氏



遠山椿吉賞特別賞 伊藤 千賀子氏

(前略) 私は広島大学を卒業後、第二内科に入局して右も左もわからない時に、たまたま教授から内分泌研究グループに決められました。間もなく教授から原爆被爆者の糖尿病について研究するよう指示が参りました。この時は原爆被爆者の糖尿病の特徴を明らかにせよとの意味か、被爆者集団について糖尿病のコホートの研究をしよとの意味か分かりませんでした。入局するまでは上の先生の下請けをしておればよいと考えておりましたので、教授

の一言は正に青天の霹靂でした。50年前ですから教授の一言は絶対でした。昭和32年に広島や長崎で原子爆弾に被爆した人々に対する法律が制定されて検診が行われていました。研究とは如何にするものかも分かりませんでした。が、くよくよしても始まらないと考え、先ず、被爆者検診を一手に引き受けている「広島原爆被爆者健康管理所」を視察しました。今から半世紀も前のことで、当時は白血病など血液疾患のスクリーニングを人海戦術で行っていました。

健康管理所の中でみたものは山積みされた10万枚の検診個人票で、血液一般、尿検査や血圧など少ない項目の中から有効なデータを取り出さなければなりません。手伝ってくれる同僚の先生と二人で来る日も来る日も個人票を1枚1枚めくり、紙に正の字を書きながら3カ月弱で全ての個人票を集計して尿糖陽性率を求めました。尿糖陽性率は女性が男性の1/3~1/4であることが明らかになり、当時高い評価を受け、これがきっかけとなって私はこの施設で糖尿病のcohort研究を行うことになり、OGTTのfollow-up研究に着手しました。1969年からは併設されている広島市医師会臨床検査センターの部長で勤務し、翌年からは健康管理所の部長になり、研究が本格化しましたが、1965年に初めてこの施設に足を踏み入れてから1969年までは非常勤として勤務しながらデータを収集しました。すべて私がこつこつと集めて参りました。新しい検査項目が開発されると必要に応じてOGTT時に追加しました。この経緯は受賞講演の中で少し述べさせていただきます。

データの分析もパンチカードからタナックのカードセレクター、1980年からはやっとパソコンを利用しましたが、分析プログラムはBASICを用いて自分で作成しました。多くの研究成果が得られました。中でもOGTTの経過観察によって日本人のデータをもとに糖尿病診断基準の作成に寄与できたことはこの半世紀に及ぶ疫学研究の成果をうれしく思っております。(後略)

遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞



西浦博氏に遠山椿吉賞奨励賞を授与

受賞記念講演：西浦博氏



遠山椿吉賞奨励賞 西浦 博氏

この度は大変立派な賞を頂きまして、誠にありがとうございます。

医学部の最終年度に疫学者を目指してから、ずっと海外で研究に従事して参りました。(中略)海外に指導者を求めてロンドンに渡り、ヨーロッパ(英国、ドイツ、オランダ)でこれまで自分のトレーニングを兼ねて研究仕事を続けて参りました。

自分でデザインしたキャリアでしたので、初めのころはとても生活するのが苦しくて、貧乏の話をするなら私に勝る者はいないと思います。ロンドンでパンの耳を貰って暮らした経験からスタートし、その後も入門時は経済的に厳しい日々が続きました。現在、やっと疫学の教育と研究で雇用していただける専門家として認識されています。

大学院生の指導をする際、私は研究者としてのキャリアを飛行機の離陸から大空をどこまで鮮やかに飛ぶのかということに例えて表現することがあります。つまり、どこまで高く飛んで、美しい飛行を見せるかということが、研究活動度を反映するという比喩的表現をするのですけれども、今回頂きました奨励賞というのは、まずうまく離陸ができたことを賞していただいたものと、私自身は受け止めています。

私は医学部を卒業しまして、今年で医者として13年目になります。(中略)去年日本に帰って来まして、今やっと少しでも貢献させていただける立場になりました。今年の夏に感染症の数理モデルの短期コースを2週間開講することを企画しています。また、兼ねてより企画していた入門書に位置づける単行本を出版させていただく予定です。

今回の奨励賞を、まさにその励みとさせていただきます。これから後進の育成にも尽力しつつ、研究に励んでまいりたいと思います。引き続き皆さまの叱咤激励をよろしく願っています。この度はどうもありがとうございました。



◆ 来賓祝辞

上島 弘嗣

滋賀医科大学 名誉教授・
同アジア疫学研究センター 特任教授

岡山 明先生、伊藤千賀子先生、西浦 博先生、このたびのご受賞、誠にありがとうございます。公衆衛生・予防医学医療に関する賞が少ない中で、このような先人の業績を顕彰する賞がもつけられ、今回、3人の方々それぞれ、健康予防医療賞、同特別賞、同奨励賞を受賞されましたことを大変嬉しく思っております。

岡山先生は私にとりまして長年の同士であり、現在も共同研究を行っている仲間であります。ともに苦勞してNIPPON DATAのコホートを立ち上げました。あれから早、20年が経過しました。岡山先生の生涯にわたる研究主題は「生活習慣病予防のための生活指導方法とそのシステムの開発」と言ってもよいと思いますが、今回の受賞はその流れの中で、保健指導と医療費の問題に焦点を当て、保健指導を積極的に行うことで医療費の伸びを抑えられる可能性を示したものです。先生のシステム作りの上手さを存分に発揮された研究であり、実践であると思います。正に、今までの先生のためめぬ努力と研究・活動の成果は、「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」にふさわしいものと考えます。

伊藤千賀子先生、おめでとうございます。伊藤先生とは古くからの顔見知りのなかであり、今も、委員会等でご一緒することがあります。伊藤先生はご卒業後、内科の教室に入られ爾来糖尿病の研究に打ち込んでこられました。先生は、長年、広島で原爆被爆者の健康管理に従事されてきましたが、その日常業務である健診の場を生かして糖尿病の診断と予防の研究・実践をされてまいりました。私も卒業後15年ほどは健診業務に従事して参りましたので、健診の場を生かした研究や予防医学の実践をすることの困難さをよく承知しております。その点からも、先生が糖負荷試験受検者の成績を生かして、糖尿病の発症予防に資する疫学研究をされてこられましたことに心より敬意を表します。

最後に、奨励賞を受賞されました西浦 博先生、おめでとうございます。先生にお会いするのは、初めてですが、今ちょうど流行が始まり話題となっております鳥インフルエンザ等の急性感染症の流行様式を定量化して、その流行の広がりを予測し予防対策を立てる、感染症の分野における数少ない理論疫学の若手研究者です。地球のいろいろな所で種々の感染症が起っています。そのためでしょうか、先生は世界各地で研鑽を積んでおられ、若いエネルギーの力強さを感じます。今後の益々のご活躍を願っています。

最後にもう一度、受賞者の皆さまのご健勝と益々のご発展を祈念して、私の祝辞を締めくくりたいと思います。本日は誠にありがとうございます。

*平成25年度「遠山椿吉記念 健康予防医療賞」授賞式について、詳細は当財団ホームページをご覧ください。 ●撮影協力：今澤 剛



◆選考委員長講評

伊藤 雅治

前 全国社会保険協会連合会 理事長

このたびの「遠山椿吉賞」は、私を含む6名の委員が選考にあたりました。

選考委員会の講評を申し上げます。

岡山 明先生のご研究は、

- ・大規模データに基づき保健指導の有用性を、医療経済的側面まで含めて明らかにした取組みで、予防の社会的重要性を明らかにした点で意義深いものです。
- ・本研究のみならず、1980年代のNIPPON DATA80という循環器疾患基礎調査をベースにしたコホート研究で日本人のエビデンスを構築したなど、疫学研究の実施とそれに基づく公衆衛生施策の実践で幅広いご業績があります。NIPPON DATA*で得られたエビデンスは健康日本21策定などに活用され、生活習慣病の日常診療でも広く用いられています。
- ・しかし、過去に受賞歴はありません。

このようなことから、岡山先生の一連のご業績に高い評価が集まり、本賞と決定しました。

伊藤千賀子先生のご研究は、

- ・1960年から約40年間継続された固定集団における糖尿病の疫学研究で、6万件に及ぶ完璧なデータ収集と解析の大部分を伊藤氏個人が行われました。この研究により、日本人の2型糖尿病の発症過程、特にインスリン抵抗性の意義がはじめて解明されたのです。
- ・また、この研究により、日本人2型糖尿病のリスクファクター

が明らかとなり、我が国における糖尿病の有病率を求めるHbA1cのカットオフポイントが決定されました。

- ・特筆すべきは、この研究により網膜症発症が認められるHbA1cが明らかとなり、そのデータが大きく寄与して国際的な糖尿病診断のHbA1cのカットオフポイントが決定されたことです。

わが国の糖尿病疫学研究において果たした役割は極めて大きく、高く評価されるご研究です。

遠山賞のコンセプトにぴったり合致しますが、「これまで受賞の機会を得なかった方のご功績に光を当てる」という賞の意義に鑑み、特別賞をお贈りすることが決定いたしました。

また、西浦 博先生のご研究は、

- ・感染症の拡大予測をするために数理的アプローチを用いた流行モデルの構築という、地味ですが重要なテーマにおける優れた研究です。そのモデルとしての正当性の実証は、今後を待たねばならない点も多いですが、極めて創造性に富む研究であります。
- ・理論疫学・統計モデルは、世界に比較して日本が遅れをとる分野であり、今後の発展が期待されます。光の当たりにくい分野で地道に研究を続けられた遠山博士の名を持つ本賞の奨励賞として決定いたしました。

選考委員長として、選考の過程を振り返りますと、この遠山賞の存在と意義を強く感じる次第であります。公衆衛生や予防医療を向上させるには、個人個人の先見的な発想力や、社会的使命に突き動かされての地道な研究が必要です。しかし、この分野においてはその重要性にもかかわらず、研究者個人に光があたるのが少ないのが現状ではないかと思えます。

この遠山椿吉賞が、今後とも多くの優れた研究者の業績や、若い研究者の将来性に光を当て、公に称えることで、次世代を担う後進の育成にもつながることを期待する次第であります。

*National Integrated Project for Prospective Observation of Non-communicable Disease And its Trends in the Aged

学術振興

日本産業衛生学会関東地方会 第263回例会

本例会は元氣プラザ及川孝光統括所長が当番幹事を務め、当財団が事務局として支援を行いました。「日本の労働・雇用環境の変動と産業保健の関わり」をテーマに、女性・高齢就業者・障害者就労者の健康管理について取り上げたものです。



◇日時：11月16日(土) 13時～17時

◇会場：星陵会館ホール

◇参加人数：251名

開会 日本産業衛生学会関東地方会会長 柳澤裕之

基調講演「どうなるニッポンの産業保健? 企業のリスク管理の視点から」

藤江俊彦(千葉商科大学政策情報学部/大学院 教授)

パネルディスカッション「わが国の労働・雇用状況と産業保健」

司会：山澤文裕(丸紅株式会社東京本社 産業医、日本陸上競技連盟医事委員会委員長)

石川良樹(みずほ健康保険組合 大手町健康開発センター所長)

I. 職域における女性の健康管理

- (1)「産業保健における女性労働者問題」 荒木葉子(荒木労働衛生コンサルタント事務所 所長)
- (2)「婦人科がん検診を中心に」 大村峯夫(こころとからだの元氣プラザ 理事・婦人科部長)

II. 高齢就業者の健康管理

- (1)「高齢者雇用と産業保健の関わり」 舟橋 敦(マツタ株式会社 専属産業医)
- (2)「高齢労働者の健康管理」 小川純人(東京大学医学部附属病院老年病科講師)

III. 海外勤務者の健康管理

海渡裕郎(三菱重工業株式会社人事部 横浜健康管理センター センター長)

IV. 障害者雇用の実際—精神障害者雇用の対策の強化に向けて

齋藤友美枝((独) 高齢・障害・求職者雇用支援機構東京障害者職業センター 主任障害者職業カウンセラー)

普及啓発 (食と環境のセミナー)

身近な食や環境の問題について

当財団では、企業の食品衛生担当者や環境衛生担当者対象のセミナーを、昭和51年よりおよそ40年にわたって開催しており、最先端の食や環境の情報提供に努めています。平成25年度は第84、85回の食と環境のセミナーを開催し、タイムリーなテーマで最新の情報を提供いたしました。

食と環境のセミナー

◆10月24日

第84回 食と環境のセミナー

(会場：日本橋教育会館 参加者数：170名)

「東京都の食品安全行政の取り組みと今後の課題」

講師：田崎 達明(東京都福祉保健局 健康安全部 食品監視課長)

「カビ毒の汚染実態とリスク評価」

講師：小西 良子(麻布大学 生命・環境科学部 食品生命科学科 教授)



田崎 達明先生の講演

◆1月20日

第85回 食と環境のセミナー

(会場：日本橋教育会館 参加者数：115名)

「中国の食品安全に関する現状と問題点」

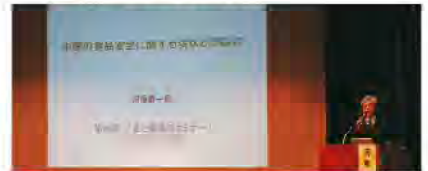
講師：河原 昌一郎(農林水産省 農林水産政策研究所 上席主任研究官)

「米国において新たに導入された食品安全強化法の概要」

講師：岡本 泰彦(三菱UFJ リサーチ&コンサルティング株式会社コンサルティング・国際事業本部 東京本部 マネジメントシステム部 チーフコンサルタント)

「緊急報告 外食のメニュー表示について」

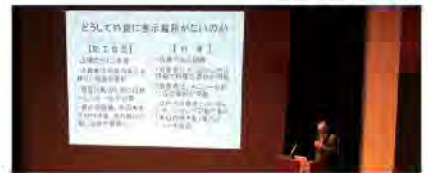
講師：中村 啓(公益財団法人食の安全・安心財団 理事・事務局長)



河原 昌一郎先生の講演



岡本 泰彦先生の講演



中村 啓 先生の講演



小西 良子先生の講演

学術振興

学会活動に対する支援

東京顕微鏡院は、1989(平成元)年4月以降25年間にわたり「日本食品微生物学会」に事務局機能を提供し、2011(平成23)年より日本カンピロバクター研究会の事務局を務めるなど、保健衛生分野における学術振興に努めています。また、日本産業衛生学会関東地方会 第263回例会開催には、当番幹事をこころとからだの元気プラザ 統括所長が務め、当財団は事務局として支援を行いました。

「日本食品微生物学会」への助成

当財団は、1989(平成元)年4月より学会事務局を担当し、学会の発展に貢献しております。

日本食品微生物学会は、「食品の微生物および寄生虫に関する学術研究の推進、並びにその成果の普及を図り、食品の安全および機能の向上に寄与すること」

を目的としています。会員数は個人・法人を含めて約1,200を有し、その半数は民間企業の所属であり、企業・研究機関・行政のいわゆる産・官・学で構成されています。

年1回行われる学術総会のほか、全国各地で学術セミナーを開催し、会員のみならず一般消費者や日々食品関連の仕事に従事する方々に、食品微生物の正しい知識や衛生管理等の最新情報を提供する活動を行っています。

(TOP>公益事業>日本食品微生物学会)

日本カンピロバクター研究会への支援

平成23年度から事務局を務め、細菌系下痢症の最も主要な病原菌である本菌

の研究者や食中毒防止や感染拡大防止に取り組む方々の、学際的な研究の推進を支援しています。

第6回日本カンピロバクター研究会総会は、第17回腸管出血性大腸菌(EHEC)感染症研究会と合同で、平成25年7月25日～26日につくば農林ホールにて開催いたしました。



第34回日本食品微生物学会学術総会



日本カンピロバクター研究会 第6回 総会

普及啓発 (メンタルヘルスセミナー)

働く人たちのこころの健康づくり

メンタルヘルス対策は、ほとんどの企業における大きな課題です。昭和60年より職域のメンタルセミナーを推進してきた当財団は、120周年を機に、公益事業の柱として外部の先生方を招聘して3年計画の実践型メンタルセミナー企画を立ち上げ、3年目を迎えました。平成23年度は企画の方向性を探り、平成24年度は職場復帰支援、本年度は職場環境改善をテーマとしました。

本年度は、職場のメンタルヘルスで根源的な課題、「職場環境」に踏み込みました。職場環境改善は単にメンタルヘルス不調者のためだけでなく、その職場で働く全ての労働者にメリットがあります。しかし、メンタルヘルス問題を考えるうえで、導入は難しいと感じる担当者が少なくありません。

企画会議では、委員の豊富な経験に基づき、様々な現場で職場環境改善の取り組みを導入するための効果的なプロセスを検討し、セミナーを実施。このセミナー参加者のうち、希望者に自職場で職場環境改善リーダーを目指すワークショップを開催しました(2013年9月と11月)。

セミナー参加率、基調講演・パネルディスカッションの満足度共に約9割で、多くの共感を得ることができました。また、ワークショップ参加者からは「他の参加者が具体的な改善を行ったのを見て、自分も始めてみようと思った」「何とか自社でも取り組めそうだった」と、抱負が述べられました。

◎平成25年度コーディネーター：

森 晃爾 (産業医科大学産業実務研修センター長)
吉川 徹 (公益財団法人労働科学研究所 副所長)
及川孝光 (当医療法人 統括所長)

■メンタルヘルスセミナー

人事・労務管理スタッフ、メンタルヘルス推進担当者、衛生管理者、医師、保健師・看護師等の皆さまに役立つ実践セミナー

◎平成25年度メンタルセミナー 3回シリーズ 第1回

◆みんなで頑張れるための 「職場環境改善を通じたメンタルヘルス対策」

◎日時：平成25年7月10日(水)13:30～16:30

◎会場：大手町ファーストスクエアカンファレンス

◎参加者数：112名

◎参加費：2,000円

◎総合司会：及川孝光、森晃爾(産業医科大学産業実務研修センター長)

◎参加方法：A. 第1回(7月25日のみ)

B. 第1回+グループワーク「メンタルヘルスと職場環境改善」(9/25、11/27)

※Bについては、第1回受講時にセミナー会場申込書を配布。



オープニング 森 晃爾先生

■平成24年度報告

「職場復帰支援～育て鍛えるという視点」

白波瀬丈一郎 (慶應義塾大学医学部精神神経科学教室 講師)

■基調講演：

「職場環境改善とメンタルヘルス」 吉川 徹



■企業事例

「参加型の職場環境改善：展開の課題と工夫点」

小林山佳(本田技研工業(株)人事部、臨床心理士)



■パネルディスカッション：

「『働く能力』の再生・向上を目指した職場復帰支援の実現」

パネリスト：吉川徹、白波瀬丈一郎、小林山佳、坂本 宣明



※中央労働災害防止協会のTHPLレベルアップ研修会に認定

■ワークショップ

◎平成25年度メンタルセミナー 3回シリーズ 第2・3回

◆みんなで頑張れるための 「職場環境改善を通じたメンタルヘルス対策」実践型ワークショップ

コーディネーター：吉川 徹、小林山佳

ファシリテーター：及川孝光、森 晃爾、小林山佳、

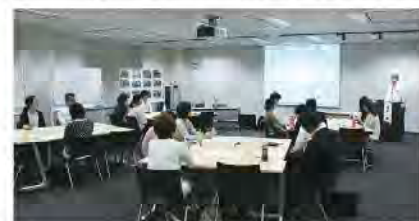
白波瀬丈一郎、坂本宣明、松浦真澄

◎日時：第1回：9月25日(水) 第2回：11月27日(水)13:30～16:30

◎会場：大手町ファーストスクエアカンファレンス

◎参加者数：16名 ◎参加費：2,000円

第1回では、メンタルヘルス対策としての職場環境改善を推進する職場担当者(職場環境改善リーダー)向けの参加型研修を体験します。各種ツールの使い方など、その理論と実践を学びます。



グループごとに意見交換

第2回は、第1回で学んだ事を自分の職場で実践し、報告するワークショップです。



ファシリテーターが介在し、グループ内で報告・意見交換・発表

■次のステップ

総括として、日本産業衛生学会(平成26年5月21日～24日)で25年度の報告を行うと共に、3年間の取組みを同学会ホームページに良好実践事例(GPS)として掲載予定です。

平成26年度は、3年間の知見を活かし、企画会議とセミナーを開催する予定です。

※メンタルセミナーの講演録は当財団ホームページで公開しています。

普及啓発 (健康セミナー)

働き盛りからの予防医療の普及開発

平成20年度から『健康日本21^{※1}』に基づく健康セミナーシリーズを展開。「人生80年代」に健やかな老後を過ごすため、働きざかりから始める健康づくりを重点課題として、「健康寿命の延伸」や「生活の質の向上」に役立つ講演会を企画しています。また、昨年度より「女性の健康週間^{※2}」に合わせ、女性の健康に関する普及啓発を始めました。企画は公益会議を通して多くの方のご意見を傾聴し、組み立てています。

※1 21世紀における国民健康づくり運動 ※2 毎年8月1～8日に開催

①健康に関するセミナー

◎シリーズ『働きざかりから始める、人生80年時代の健康づくり』全2回
(会場はいずれも女性就業支援センター)

◆9月4日「働き世代から始める、健康寿命を延ばす口腔ケア～全身の健康と口腔の密接な関係とは」

(参加者数:234名)

講師:松下健二(独立行政法人国立長寿医療研究センター 口腔疾患研究部 部長)

司会:小椋直樹(三菱東京UFJ銀行健康センター 副所長、歯科医局長)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、日本栄養士会、東京都栄養士会、8020

*中央労働災害防止協会のTHPレベルアップ研修会に認定



わが国では超高齢社会の到来とともに介護を必要とする人が増えています。近年、認知症や寝たきりといった問題や生活習慣病に、口や歯の健康が深く関わっていることが分かってきました。自立した生活を送れる“健康寿命”を延ばすためには、働きざかりから始める「口の健康」維持がキーポイントになります。

歯周病や口腔感染症がご専門で、長年、口腔と全身の健康の関係について研究されている松下健二先生が口腔と全身の健康の関わり、歯の喪失と死亡リスク、成人の8割が罹患するといわれる歯周病と糖尿病・認知症等の関係、口腔の機能維持の重要性などをわかりやすくご紹介しました。



(講演内容を、講師の先生方のご理解・ご協力により、小冊子に編集しています⇒P13)

◆12月10日「働き世代に潜む“サイレントキラー”、高血圧対策!」

(参加者数:254名)

講師:菊尾七臣(自治医科大学内科学講座循環器内科学部門 主任教授)

司会:栗原由美子(当医療法人 循環器内科医)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会、日本栄養士会、東京都栄養士会、日本高血圧学会

*中央労働災害防止協会のTHPレベルアップ研修会に認定



日本人の高血圧患者は約4000万人と推定されていますが、実際に治療を受けているのはそのうちの約2割といわれています。高血圧には特有な自覚症状はほとんどありませんが、脳卒中や心不全などの主要な危険因子であり、これら循環器疾患の発症を未然に防ぐためにも、早めの高血圧対策が肝心です。

今回のセミナーでは、高血圧と心血管疾患の病因・治療をご専門の菊尾七臣先生が、働き世代に増加する仮面高血圧という“サイレントキラー”をどう見つけるか、高血圧を予防・改善する生活習慣などについて、わかりやすくお話しされ、また、高血圧の現状として、当医療法人循環器内科医 栗原由美子医師より、元氣プラザ定期一般健康診断データ(約14万人)の解析結果をご紹介しました。



②女性の健康に関するセミナー

◎シリーズ『元気に働き、人生を楽しむ女性の健康講座』第2回
(会場は女性就業支援センター)

◆3月5日「女性のライフサイクルとメンタルケア～ストレスを減らし心を整える技術“マインドフルネス”」
(参加者数:266名)

講師:香山リカ(精神科医、立教大学現代心理学部 教授)

司会:小屋松女子(当医療法人産婦人科医、メノポーズ(更年期)カウンセラー)

後援:厚生労働省、東京都、健康日本21推進全国連絡協議会

*中央労働災害防止協会のTHPレベルアップ研修会に認定



女性が生涯を通じて健康で明るく充実した日々を過ごすために、今回は、精神科医の香山リカ先生より、ライフステージごとのメンタル面の健康づくりをご紹介するとともに、健康な方でも自分のできるストレス低減法「マインドフルネス認知療法」の呼吸法を体験いただきました。

後半は、参加者の質問を元に、元氣プラザ小屋松医師が婦人科の観点から、香山先生が精神科の観点からディスカッションを展開しました。



地域貢献

次世代を担う子どもたちへ

本年度は、120周年を機に交流の深まった創業者遠山椿吉の生誕地、山形県山辺町と連携。山形県立山辺高校食物科の「レトルト食品開発研究」の衛生指導に協力し、山辺町の子どもたちのセミナー参加枠を設けました。平成18年より始めた夏休み「子ども研究者体験」セミナーも、8年目を迎えました。サイエンスを学ぶ楽しさ、食品の安全性や健康に関心を持つきっかけとなれば幸いです。継続して、次世代を対象とした衛生思想の普及啓発に努めています。

■平成25年度「夏休み子ども研究者体験」セミナー

白衣を着て、手についた菌や食べ物の中の菌、食べ物に含まれる色を観察しよう！

■Aコース:8月1日(木)~2日(金) ■Bコース:8月8日(木)~9日(金)

◎会場:豊海研究所 4F 会議室・実習室 ◎参加人数:32名

◎講師・協力:公益委員、調査研究室、食品微生物検査部、食品理化学検査部

◎後援:中央区教育委員会 ◎協力:山形県山辺町教育委員会 ◎参加校:中央区立12校、山辺町立山辺小学校

平成25年度「夏休み子ども研究者体験」セミナー	
1日目	10:00~12:00
	① 手に付いている菌を調べてみよう！
	② 食べ物の中の菌を調べてみよう！
	③ 食べ物に含まれる色素を取り出そう！
	④ 食べ物に含まれる色を観よう！
2日目	10:00~12:00
	① 食べ物の中(「菌」)を観よう！
	② 食品から取り出した食品で酸性・アルカリ性を調べよう！
	③ 食品の酸度・糖度の測定
	12:00~13:00
	昼食・休憩
	13:00~15:45
	④ 手に付いている菌の菌数を調べよう！
	⑤ 菌を染色して顕微鏡で観察しよう！
	⑥ 食べ物の中の菌を観察しよう！
	15:45~16:00
	感想文の作成
	終了挨拶
	記念撮影

平成25年度「夏休み子ども研究者体験」セミナープログラム



手洗いの前後で、手に付着する菌の量の変化が一目でわかる実験



顕微鏡を覗いた先には、いつもと違う世界が広がっています

豊海研究所で2年目の開催、スタートから8年目となった子どもセミナー。

本年度は新たに、身近な食品をテーマに、納豆とヨーグルトの加熱前と加熱後の菌を、白金線で2種類の培地に移植し、24時間培養後、それぞれの菌の違いを顕微鏡で観察しました。

また、色をテーマに、ペーパークロマトグラフィーという分析法で、カラフルなチョコレートの着色料の成分を取り出し、合成着色料について学びました。天然色素を使った検査では、紫キャベツから取り出した「紫色」と、カレーに使われる香辛料のターメリックから取り出した「黄色」を利用してリトマス試験紙を作り、身の回りの食品が酸性かアルカリ性かを調べる実験にも取り組みました。

二日目の体験学習後には、豊海研究所内を見学し、ペーパークロマトグラフィーが実際の着色料の検査で使われている様子や様々な食品検査の様子を見学しました。

参加者より「思ったより菌は身近にある

ことがわかりました」「たくさんのことを学びました。自由研究で役に立つことがたくさんあり、知識が増えた。とても楽しかったので、また参加したい」などの感想が寄せられました。

本年度はAコースに山辺小学校から6年生児童4名の特別参加があり、研究体験を通して交流を深めました。



Aコースには山辺小学校の子どもたちが参加しました



実験と交流を思い切り楽しんだBコースの子どもたち

■高校生の「レトルト食品の開発研究」に衛生指導

山形県立山辺高校食物科の「地元食材を使ったレトルト食品開発」と題する体験学習をサポートしました。



伊藤武理事の出前授業



生徒から感謝の言葉



試食会準備の様相

農産加工施設の安全衛生管理に関する助言をはじめ、食材の栄養分析や、販売の許認可取得に必要な細菌検査を行いました。また、出前授業として、レトルトパック内で発生するボツリヌス菌等の危険性についてや、安全衛生指導のため、当法人伊藤武理事が高校を訪れました。

講義後には地元の高齢者を招いた試食会が開催され、生徒たちにとって忘れられない体験学習となったようです。



試食会で出されたレトルトメニュー「山辺産の「粟米豚(まいまいどん)」を使用

出版関連

健康・生活情報の普及および啓発

平成20年度から、公益セミナーの講演内容を小冊子で発刊し、継続して予防医療の普及・啓発を行っています。人事・メンタルヘルス推進担当者・産業保健職向けに企画・開催したメンタルセミナー（平成23～25年度）の講演録を発刊しました。

■働きざかりから始める、人生80年代の健康づくり⑮

「人生80年代の健康づくり」セミナーを読みやすい小冊子にまとめました。口腔ケアと高齢者に多い誤謬性肺炎との関わり、歯周病と糖尿病、動脈硬化、アルツハイマー病との密接な関係など、全身の健康を保つための口腔ケアの重要性を紹介しています。



新刊

発行日：平成26年3月 サイズ：A5版
ページ：46ページ
発行部数：1,000部 価値：350円

⑮ 働きざかりから始める、健康寿命を延ばす口腔ケア
～全身の健康と口腔の密接な関係とは～
松下 健二（独立行政法人国立長寿医療研究センター 口腔疾患研究部 部長）
※当財団ホームページよりご購入いただけます。

■平成23～25年度 メンタルヘルスセミナー企画 講演録

3年間のメンタルヘルスセミナー企画シリーズを、講師の先生方のご理解、ご協力をいただき、講演録にまとめて発刊いたしました。平成25年度は職場環境改善とメンタルヘルス、企業の事例などを分かりやすく紹介。人事・労務管理やメンタルヘルス推進担当者、産業保健従事者などに役立つ実践的な内容です。

企画委員会アドバイザー：森 晃爾（産業医科大学産業医 実務研修センター長）
座長：及川 孝光（こころとからだの元氣プラザ 統括所長）



- ①第1年度「みんなで“頑張れる”ためのメンタルヘルス～職場における新たな展開を模索する」
- ②第2年度「みんなで頑張っている『職場復帰支援』を考える」
- ③第3年度「みんなで“頑張れる”ための職場環境改善を通じたメンタルヘルス対策」

発行日：平成25年7月31日(①、②)、26年3月31日(③)
サイズなど：A4版、46ページ(①)、82ページ(②)、86ページ(③)
コーディネーター：森 晃爾(①)、
白波 順 丈 一 郎 (慶應義塾大学医学部 精神神経学教室 講師)(②)
吉川 徹 (公財労働科学研究所 副所長)(③)

※当財団ホームページで公開しています。

■平成24年度 事業年報

両法人事業の情報開示や公益事業・研究活動の紹介を目的としており、平成20年度事業年報から継続して遠山椿吉賞受賞記念講演の講演録を掲載しています。また「トビックス」や「研究報告」ページにおいて写真や図表の掲載を増やし、理解度の向上に努めました。



新刊

発行日：平成25年8月30日
サイズなど：A4判 212ページ
本編・データ編CD-ROM付属
発行部数：1,000部
配布先：契約先、関係行政機関、
関係研究機関、関係団体など



公益事業については、下記を掲載しました。

〈平成24年度 公益事業研究報告〉

- ① 子宮頸がん検診者におけるHPV感染者のTypingの調査・研究
- ② 尿中ミオイントールの美用化に向けた応用研究
- ③ 牛胆汁の個体差と病原菌および衛生指標菌の消長
- ④ 環境からの腸管出血性大腸菌検査法に関する基礎的検討
- ⑤ 食品のトランス脂肪酸、飽和、不飽和脂肪酸、コレステロールの含有量調査
- ⑥ 貯水槽水道における水質に関する研究
- ⑦ バッシブサンプラーを活用した総揮発性有機化合物(TVOC)測定法の開発

〈遠山椿吉賞受賞記念講演会 講演録〉

- 第3回 食と環境の科学賞
「マイコトキシンの毒性発現機序ならびに健康リスク評価に関する研究」
受賞者 小西 良了 (国立医薬品食品衛生研究所 衛生微生物部部長)
- 第3回 食と環境の科学賞 功労賞
「シックハウス症候群、化学物質過敏症および関連疾患の診断、治療、疫学、対策に関する研究」
受賞者 石川 哲 (元北里大学医学部長、元日本臨床環境医学会理事長、北里大学名誉教授)

■公益事業レポート2012



公益事業の年次ディスクロージャー誌として発刊しました。ステークホルダーの皆様に対して、当財団・医療法人の公益事業の情報開示に役立てられています。

新刊

発行日：平成25年5月20日
サイズなど：A4判 20ページ
発行部数：3,000部

※当財団ホームページで公開しています。

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの歴史と公益事業

～3つの世紀にわたる歩み

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き	【戦前】	普及啓発活動、出版、その他公益活動 など
遠山橋吉、佐藤保、川上元治郎が協同して、京橋区にあった成成会の一室を借り、「東京顕微鏡検査所」を創立。検査業務開始	1800年～ 1891(明治24)年	『結核菌簡便検査法』出版
病原的細菌標本の頒布を開始し、本所考案の喀痰沈殿器を製造販売	1892(明治25)年	 <p>『顕微鏡』第1号(1894～1944年) ※後に「東京顕微鏡学会雑誌」に改称し、1944(昭和19)年戦時統制令で休刊するまで50年間発行</p>
細菌検査の実務指導を行う講習料を開講	1894(明治27)年	
名称を東京顕微鏡院と改称	1895(明治28)年	『顕微鏡の祖』マルビギー200年記念式典、本院にて挙行
種痘術講習科を新設。培養基の発売開始	1896(明治29)年	コレラ講習会を開催
飲料水の検査を開始	1899(明治32)年	回帰熱講習会を開催
母乳検査を開始	1900年～	ベスト講習会を開催
事業拡大にともない、神田区小川町に移転	1903(明治36)年	<div data-bbox="1129 719 1460 831" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 第2回日本医学会(1893年(明治26年)) 東京顕微鏡院が、東京慈恵医院、海軍軍医学校、伝染病研究所、大日本製薬会社と並び、参観先となる </div>
遠山橋吉院長、初代東京市衛生試験所長に任ぜられる、ベスト試験室を新設	1907(明治40)年	<div data-bbox="1129 875 1460 931" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 上水協議会(日本水道協会の前身)(1904年(明治37年)) 遠山橋吉の呼びかけで設立 </div>
遠山橋吉院長、医学博士の学位を授与される	1908(明治41)年	来日したコッホ博士を囲む生花の会(於帝国ホテル) 前列左からロベルト・コッホ博士、北里柴三郎博士、後列左から2人目が遠山橋吉
保健部を新設。広く世間の人びとに対し、健康診査(健康診断)と衛生上の協議(衛生相談)を開始	1914(大正3)年	 <p>『結核征伐の歌』</p>
遠山橋吉院長、東京市参事会より独ベルリン市開催万国衛生および民勢学会参列、欧州各都市衛生設備実況調査を命ぜられる	1915(大正4)年	『遠山博士脚氣病原因之研究』発行
同時に、内務省より欧米都市における汚物掃除の実況調査を嘱託(翌年帰国)	1922(大正11)年	『人生の意義と道徳の淵源』出版。天皇に献上
遠山橋吉院長、内閣より医術開業試験委員を命ぜられる	1923(大正12)年	 <p>『脚氣病原因之研究』</p>
(院長、長年来の研究による)脚氣治療薬うりひんを製品化	1927(昭和2)年	『人生の意義と道徳の淵源』出版。天皇に献上
創立30周年記念祝賀会	1928(昭和3)年	脚氣の無料診療を開始
9月1日関東大震災により、院舎およびその設備をすべて焼失。9月6日麻布区富士見町に仮院舎を建設し、	1929(昭和4)年	第1回脚氣無料巡回診療実施(財団法人東京顕微鏡院社会部)
10月1日一般業務を再開	1930(昭和5)年	結核予防週間および健康週間に参加し、無料喀痰検査などを実施
内務大臣より財団法人の設立許可を受ける	1935(昭和10)年	
遠山橋吉、肺がんのため遠逝享年71	1945(昭和20)年	
レントゲン深部治療開始	【戦後】	
創立50周年記念式典(1940年)	1954(昭和29)年	
戦災により、以後10年にわたり事業中断	1955(昭和30)年	
<div data-bbox="587 1211 710 1400" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  <p>うりひん広告</p> </div>	1967(昭和42)年	
<div data-bbox="470 1458 678 1601" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  <p>震災後に復興した東京顕微鏡院本院(1925年竣工)二年、病室新築検査室新設、レントゲン科新設</p> </div>	1972(昭和47)年	
<div data-bbox="480 1720 726 1832" style="border: 1px solid black; padding: 5px;">  <p>旧院の様子(1970年)</p> </div>	1974(昭和49)年	
遠山正路院長より事業を継承	1975(昭和50)年	
診療所を開設、細菌検査所を再開	1976(昭和51)年	
職域を対象とした健康診断業務を開始。外来診療開始	1978(昭和53)年	
臨床検査は病院からの受託のほか、学校保健法による集団検査を拡大	1954(昭和29)年	
東京都の委託を受け、小中学生の大気汚染の影響調査を実施(5年継続)	1955(昭和30)年	
建替えによる新院舎完成。人間ドック事業を開始。付属臨床検査所を登録	1967(昭和42)年	
食品衛生法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受け、食品衛生検査所を開設	1972(昭和47)年	
がん検診(胃、子宮、乳房)開始。多摩分室を立川に開設	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	
	1954(昭和29)年	
	1955(昭和30)年	
	1967(昭和42)年	
	1972(昭和47)年	
	1974(昭和49)年	
	1975(昭和50)年	
	1976(昭和51)年	
	1978(昭和53)年	

歴代代表者	(在任期間)	歴代代表者	(在任期間)
創立者(院長)	遠山 椿吉 1891~1928年	第5代(理事長)	山田 匡蔵 1967~1989年
第2代(院長)	遠山 正路 1929~1954年	第6代(理事長)	山田 和江 1989~1995年
第3代(院長)	細谷 省吾 1955~1957年	第7代(理事長)	下村 清子 1995~2007年
第4代(院長)	高橋 徳三 1957~1967年	現理事長	山田 匡通 2007年~

東京顕微鏡院、こころとからだの元氣プラザの主な動き		普及啓発活動、出版、その他公益活動 など	
水道法に基づく厚生大臣指定検査機関の指定を受ける(簡易専用水道検査)	1979(昭和54)年		
立川衛生検査センターを開設	1986(昭和61)年	再興30周年記念シンポジウム「21世紀のいのちと生活」を開催	
付属第2臨床検査所を登録	1987(昭和62)年	学術普及誌「健康と環境」創刊(~2000年)	
 簡易専用水道検査 (1979年~)	1991(平成3)年	創立100周年記念シンポジウム「21世紀への生命潮流」を開催	
	1992(平成4)年	シンポジウム「ベイブリッジフォーラム'92 —21世紀への対がん戦略」を開催	 シンポジウム「ベイブリッジフォーラム'92 21世紀への対がん戦略」
	1996(平成8)年	平成4年度より事業年報の発行開始	
食品検査施設を移転し、日本橋研究所を開設 (2001、2002、2005年に順次拡大)	1997(平成9)年	シンポジウム「新時代の高血圧管理」「職場と住宅環境を考える」などを開催	
立川事務所を開設、食品等分析調査研究所を合併 (1998年、食と環境の科学センター検査第3部に改組)	1998(平成10)年	シンポジウム「新しい時代の糖尿病対策」 「はたらく女性とメンタルヘルス」などを開催	
会員制人間ドックを開始			
2000年~			
食と環境の科学センター日本橋研究所に検査第3部を移転し、拡大 トータルヘルスセンターBe-Well!、 女性のための生涯医療センターViViを開設	2001(平成13)年	創立110周年記念日米メディカルシンポジウム 「21世紀の女性と性(ジェンダー)と健康」を開催	
 こころとからだの元氣プラザ (2003年~)	2002(平成14)年	創立110周年記念シンポジウム「食の安全と健康を考える」を開催	
	2003(平成15)年	女性のための生涯医療センターViVi 開設1周年記念シンポジウム 「アダムとイブの医療革命」を開催	
	2005(平成17)年	東京顕微鏡院創立115年、こころとからだの元氣プラザ創立3年 記念シンポジウム「いのちとは何か、生きるとは何か」を開催	
立川研究所を一ヶ所に統合拡大 こころとからだの元氣プラザ(飯田橋)と市ヶ谷本院の施設再配置 こころとからだの元氣プラザ(飯田橋)外来診療と 女性のための生涯医療センターViViを統合	2007(平成19)年	メディカル・シンポジウム「医療の未来、日本の未来 —なぜ日本では高度先端医療が遅れているのか?」を開催	
	2008(平成20)年	遠山椿吉生誕150年、没後80年を記念して遠山椿吉賞創設	
	2009(平成21)年	「遠山椿吉記念 第1回 食と環境の科学賞」を西尾治氏、 同奨励賞を川崎晋氏に授与 遠山椿吉生誕150周年記念シンポジウム「東京の水の源流を探る ~豊かな東京の水利用を支える日本の水、世界の水~」を開催	
こころとからだの元氣プラザ、アジュール竹芝総合健診センターの運営を受託 臨床検査部がこころとからだの元氣プラザの組織に移行 三菱化学メディエンスと共同運営で「元氣プラザ臨床検査センター」をスタート	2010(平成22)年	「遠山椿吉記念 第1回 健康予防医療賞」を鈴木隆雄氏、 同特別賞を中村雅一氏に授与	
3月11日 東日本大震災により、 創立120周年記念式典・祝賀会、創立120周年記念顧客イベント中止 4月1日 創立120周年	2011(平成23)年	「遠山椿吉記念 第2回 食と環境の科学賞」を塩見一雄氏、 同特別賞を小泉昭夫氏に授与 創立120周年記念シンポジウム「アルツハイマー型認知症の治療・ 予防戦略—研究・治療・ケアの最前線から」を開催	
 豊海研究所 (2012年~)	2012(平成24)年	「遠山椿吉記念 第2回 健康予防医療賞」を白木正孝氏、 同特別記念賞を久山町研究グループ 代表 清原 裕氏に授与	
豊海センタービル竣工 日本橋研究所が施設拡充に伴い、豊海研究所に移転	2013(平成25)年	「遠山椿吉記念 第3回 食と環境の科学賞」を小西良子氏、 同功労賞を石川哲氏に授与 「創立120周年記念誌」を刊行	
4月1日に財団法人東京顕微鏡院は一般財団法人に移行、 「一般財団法人 東京顕微鏡院」と名称変更	2014(平成26)年	「遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞」を 岡山明氏に、同特別賞を伊藤千賀子氏に、 同奨励賞を西浦博氏に授与	 遠山椿吉記念 第3回 健康予防医療賞 (右:岡山氏 中央:伊藤氏 左:西浦氏)

Our Credo 私たちの公益事業

1. 創業精神に則り、人びとの健康と、食品の安全、生活環境衛生向上のため、両法人の事業を基盤に、世の中に貢献します。
2. 時代の先を見つめ、先駆的な視点から発信することに努めます。
3. 職員が参画意識を持てる仕組みを作り、組織の活性化に生かします。

<顕彰制度>

- *遠山椿吉記念 第4回 食と環境の科学賞顕彰
(告知、応募論文募集、選考委員会開催、授賞式・記念講演・レセプション開催、講演録作成)
- *遠山椿吉記念 第4回 健康予防医療賞(平成27年度)準備

<セミナー・シンポジウム>

- *健康テーマ
- *メンタルヘルステーマ
- *女性の健康テーマ

<出版>

- *企画出版
- 講演録



<次世代育成>

- *夏休み「子ども研究者体験」セミナー

<その他>

- *公益事業レポート

2014(平成26)年度 公益事業計画

発行:

一般財団法人東京顕微鏡院 公益事業室

〒102-8288 東京都千代田区九段南4-8-32 TEL.03-5210-6651 <http://www.kenko-kenbi.or.jp/>

医療法人社団こころとからだの元氣プラザ 広報室

〒102-8508 東京都千代田区飯田橋3-6-5 TEL.03-5210-6897 <http://www.genkiplaza.or.jp/>

問合せ先: 三橋 祥江 制作: 水戸 純一、八木 忍、飯島 敏樹 デザイン: 金沢 謙児

2014.5.29発行